

海水浴客の飲酒に関する調査研究—逗子海岸における実態調査—

0814042 安井 博昭 (海洋スポーツ健康科学研究室)

I. はじめに

飲酒と水難事故との間には密接な関係が報告されている。近年の国民の余暇活動として夏期には海水浴場での海水浴が人々に普及している。しかし、海水浴場において飲酒に伴う事故が多発しており、今後も事故の増加が懸念される。本研究では海水浴客の飲酒行動には問題があると考え、神奈川県逗子海水浴場における飲酒状況の実態調査を行ったので報告する。

II. 方法

神奈川県逗子海水浴場における飲酒状況の実態調査を、平成 23 年 7 月 28 日から 7 月 31 日にかけての計 4 日間に 20 代から 60 代の男性 242 名、女性 180 名、計 424 名の海水浴客を対象として行った。対象者には自記式の質問紙をその場で配布し回収した。調査項目は①性別及び年齢、②調査時の飲酒の有無③飲酒後の海水浴の有無、④海水浴前日の飲酒の有無、⑤普段の飲酒頻度、⑥調査時の飲酒量の 6 項目とした。

III. 結果および考察

調査の結果、海水浴場での飲酒率は約 9 割であった。「海水浴前日の飲酒の有無」と「飲酒後の海水浴の有無」を比較した結果、「海水浴前日」に飲酒した者かつ「飲酒後に海水浴」した者が多かった。このことから飲酒に対する危険性の意識が低いことを表していると考えられる。ノンアルコール市場実態調査(2011 年)と海水浴客の飲酒頻度を比較した結果、普段から飲酒頻度の高い者が海水浴場には多いことがわかった。年代別の飲酒頻度(飲酒習慣の無い者)について国税庁調べ(2005)の結果と海水浴客の結果を比較した結果、海水浴客のうち普段の飲酒頻度が高い者は特に、20 代が多かった。「飲酒後の海水浴の有無」と「調査時の飲酒の有無」を比較した結果、「飲酒後に海水浴をする」に対して、『いいえ』、「調査時の飲酒の有無」に対して、『なし』の回答が少なかった。このことから、飲酒後に水に入る行為に対する危険性の意識が低いと考えられる。

IV. 結論

神奈川県逗子海岸での海水浴客の飲酒状況及び普段の飲酒習慣を把握することができた。また、調査対象者の多くが飲酒後に海水浴をしていた。今後は海水浴場において海水浴中での飲酒の危険性、安全管理に対する意識を実感させるための指導方法を考える必要がある。

主な参考文献

・長峯正典(2002)「大学生の飲酒についての意識調査」, 東京海洋大学 海洋健康科学分野 卒業論文